

5、句碑「無き君の心の程を知る者を……」

こうして、竣工を期して、偉業者のために記念碑にすべく購入されていた阿部川石は、建立されることなく、上地八幡宮の石灯籠の石掛けにいつまでも放置されていました。そして、ついに、大正末期、上地八幡宮本殿が国宝に指定された折、「国宝上地八幡宮」の文字が刻み込まれてしまったのです。

その後、稲石藤六氏（上地荒井六十二番地）と成瀬彦平氏（上地宝六二十五番地）が寄付をし、田中作次氏（上地荒井七十二番地）が寂靜寺境内に、現在の碑を建立するに至ったということです。

稲石藤六氏のお孫さんが現在福岡上地消防団長の正美さん、成瀬彦平氏のご子息が第一上地区画整理組合副理事長の義信さん、田中作次氏のご子息が上地農園芸ご主人の義兄に当たられます。そして、昨年、記念碑は区画整理事業の完成を機に、現在地の大谷下池のほとりに移転されたのです。

「無き君の心の程を知る者を やむに止まれず 古連能の石ふみ」

―稲石藤六 歌―



建立された昭和二十八年から、すでに四十年近い歳月が過ぎていきます。そのために、碑文は風化が進み、一部不鮮明になっています。稲石氏の歌にも「古連能」とありますが、以前、「小連能」と読んだ記録もあります。この学校だより編集に当たって、再度鉛筆でこの部分の拓本をしたのが右のコピーです。（佐野佳三・長坂信一教諭による）

ふるさと上地を開いた先人への想いを募らせながら、是非とも春の散策のコースの一つとして訪れてみて下さい。

二、校長通信

四月八日のお地藏さん

江戸時代の昔から、鎌倉街道の辻、藤六という所にあつたお地藏さん。百五十年間、上地の村人や旅人の安全を守っていた。風雨にさらされ、目や鼻がすりへってしまいましたが、「右おかざき 左とろ」という案内の字は、かすかに読むことができます。

もともとお地藏さんというのは庶民のものです。偉い仏さんのように、高い所から見下ろしたり、奥の院の暗い所に座っていたりすることはありません。だれにでもすぐ手の届く道端で、遊ぶ子供たちに、いつもほほえみかけていたのでしょう。

ところが区画整理のため、このへんを掘り起こすことになりました。古い道がなくなってしまう。お地藏さんにも引越しをしていただくことになりました。

幸い近くに公園ができたので、公園の中へ置いたらという声もありました。しかし、こういうものは公の場所に置くことはできません。そこで、公園と道路の境に安置することになりました。突然の引越しでは、いくらお地藏さんでもびつくりします。そこで、お坊さんにお経をあげてもらいました。「申し訳ありませんが、こういうわけです。どうか引越しをお願いします。」という意味です。この地藏公園ができたのが、昭和五十六年のことでした。この地を安住の地としていただき、近くの星野ときさんが朝な夕なお世話をします。近所の人も、時々お供え物をあげたり、お花を代えたりします。子供たちも代わる代わる野の花を摘んできては飾ります。登校するときには「おはよう。」と声をかけて通る子もいます。

しかし、長い間の風雪のため、さすがに傷みもひどいのです。これ以上、外にさらしておいては申し訳ないという声が、みなさんから上がってきました。

そのころ、ちょうどいいぐあいに「たけひろ」さんから話がありました。

「たけひろ」さんのおじいさん、おばあさんが信心深い人で、自分で祭っていた弘法さんの家を新しくしました。元の家は空いてしまう。そんなに古くない。それをそっくりもらい移して入ってもらったらどうだろう、ということでした。

願っても無いこと。土地区画整理組合理事長の畔柳八百吉さんや、副理事長の畔柳市太郎さんらのお力で、家の引越しとなりました。

四月七日。朝からどんより曇って、いまにも降り出しそう。運よく建て終わるころ雨が落ちてきました。

翌四月八日は、おしゃか様生誕を祝う「花祭りの日」。家の完工式にこの意義ある日を選んだのです。でも、朝からひどい雨です。どうなることかと思っていました。昼ごろになると明るくなり雨が上がりました。お花を代えたり、掃除をしたり、お供えをしたり。雑きんで板をふいていると近くの子が二人（四年の稲石浩子さん、梶川由加利さん）来て、「おじさん手伝ってあげるよ。」と言って一緒に掃除してくれたそうです。

お経のあがる二時半には、日も射すうらかな天気になりました。

「昨日も今日も、その時になると天気がよくなる。お地藏さんが守ってくださるんですねえ。」

とは関係者の声です。赤地に白く染め抜いた「道祖神」の旗が春風になびきます。

「私は心の道しるべと思って拝んでいます。」

と言われる星野さん。六区の高柳総代さん、八区に加藤総代さんはじめ、みんなで三十余人。お参りしてから、お供えのお下がりをもらって家路につきました。

何だか心休まるひとときでした。



子育ては手づくりで

はじめに、三年生のA君の日記をご紹介します。

学校日より（四月号）の上地八景を読

んで、さっそく家族で歩いてくださいました。きっと親子で楽しく話し合いながら歩かれたことでしょう。学校のこと、友だちのこと、将来のことなどの話に花が咲いたことと思います。（何と堅実なご家庭だろう）と、感心しました。

こういう家庭だったら、しつととか、親子の対話とか、家庭の交流とかは、こ

く自然にできます。この「自然に」というのが大切で、知らず知らずのうちに身に付いていくのが本物だと思います。着る物はほとんど他人の作った物になりました。食べる物もインスタント食品の普及で手抜きができるようになりました。レジャーまでも他人まかせになりがちなこのごろです。

しかし、子育てはいつの時代も手づくりでないとうまくいきません。

このようなご家庭があることを知って、私たちも勇気づけられうれしく思います。

今日、お母さんとお姉ちゃんとおぼくで「上地八景」を全部歩こう、とい
って三人で歩きました。初めは奥山田池、次は大谷公園に行き、かげぼろ
し（日時計）でしゃしんをとりました。
次は二四八号線、ドミールと回り、寂静寺（じゃくじょうじ）に行つて、
またしゃしんをとりました。そこにネコがいたので、遊びました。
そして、三善寺（さんぜんじ）、上地しつげんを回り、家へ帰りました。
上地にもいろいろなお場所があり、とてもためになりました。（五月六日）

うなり石

作 校長 嶋田 稔

むかしの大谷坂（おおやさか）は、大きい木がたくさん生えておって、昼でもうすぐらいところでした。ここを、細くてじめじめした吉良道（きらみち）が通っていました。

ある年の秋、上地のごへえさは、馬頭（ばとう）の村のお祭りに行って、夜おそく吉良道を帰ってきました。お酒をよばれて一ぱいきげんで、鼻歌を歌いながら、やってきました。ちようど、峠（とうげ）にさしかかったころ、風がビューーと吹いてきて、ちようちんのあかりが、ぱっと消えてしまいました。

「ちえっ、これじゃあまっ暗で、鼻をつままれてもわからんなあ。よいもさめちまうなあ。」と、言いながら、急ぎはじめました。

そのとき、山の中で、
「ううー。ううー。」

と、女の人のうなる声が聞こえました。

「ひやー。お、お、おばけー。」

ごへえさは、おみやげのすしを投げすて、ころがるようにして、村へ帰りました。

「お、お、おんなの声だった……。。」

「そんなばかなことがあるもんか。おまえさん、きつとキツネにばかされたらあ。」

村の人は、はじめ、ごへえさの言うことを信用しませんでした。

「わしは、ほんとに女の人の泣き声を、この耳で聞いただ。」

「よし、そんなに言うなら、おれたちが行って見てきてやる。」

元気のいい若いしゆうが三人、次の日の晩に、大谷坂へいさんででかけて行きました。

大谷坂はいかかわらず、暗くてじめじめしていました。

どこかで「ホーホー」とふくろうが鳴いています。たいまつで、あちこちてらして見ました。

「なんだ、なんにもおらんじやないか。ばからしい。」

「ごへえのやつ、やっぱりキツネにばかされただな。」

こう言って帰りかけると、あたたかい風がふあーと吹いて、木の葉がきゆうにさわいだしました。あつと思つたら、たいまつが火がふつと消えて、まっくらになってしまいました。

「ううー。ううー。」

「あ、聞こえる聞こえる。」

あたりを見まわしましたが、だれもいません。

「おかしいなあ。」

「こっちだこっちだ。」

声のする方へ行つてみると、いきなり、黒い

入道（にゆうどう）が、

「ううー。ううー。」

と、声をだしました。

「ひややー。出、出、出たーあー。」



6年 安達真妃絵

若いしゅうは、みんなにげ帰ってしまいました。そして、三人とも、ねつを出して寝こんでしまいました。

あくる日、村の人が明るくなってから行ってみると、石が立っているだけでした。そのころから、この石をだれ言うもなく「うなり石」「うなり石」と言うようになりまし

た。

村一番の力持ちのかんすけは、これを聞いてだまっておれませんか。
「なに、石がうなる。そんなばかなことがあるもんか。おれが正体（しょうたい）をあばいてやる。みんなついてこい。」

と、こんどは昼ま出かけて行きました。

「なんだ、ただの石じゃねえか。うちの庭石にちようどいい。ほって運んで行こう。」

「そんなこと、やめたほうがいいぞ。」

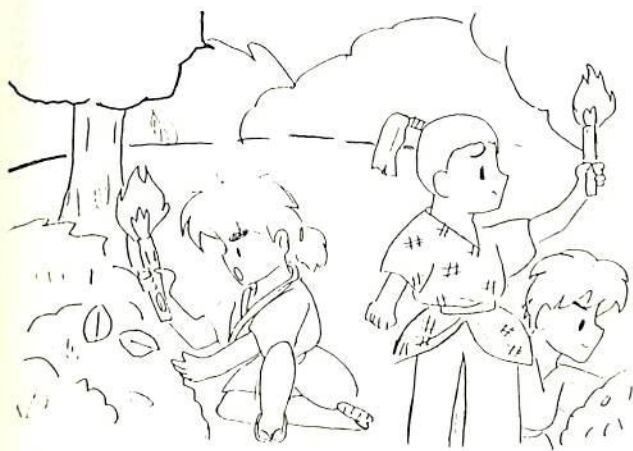
「なに、かまうもんか。」

ざくつとくわをいれたとたん、石が、

「ギャーギャー。」

かんすけは、くわをほっぽり出してにげて帰りました。見ていた人たちも、真っ青になっ

てかけだしました。
かんすけも、やはりわけのわからん病気になるって、寝こんでしまいました。



6年 安達真妃絵

こんなことがあったので、村のしゅうは、「神（かん）ぬし」さんにたのんで、おがんでもらいました。そうしたら、うなり声はびたりととまったそうです。それでも大谷坂を通るとき、気持ちが悪いので、この石は上地八幡さんへ運んできて、すえたということです。この「うなり石」は、今でも上地八幡さんのけいだいにあります。

（注）上地八幡の立札の説明

伝説の奇石 唸石

この奇石の源は知らず 夜陰深更に及び

神域寂として陰雲籠り 冷雨まさに来ら

んとす 鳴唸暫し 里人旅人唸石とぞ唱

え 子々相伝え今に及ぶ

上地町、加藤信太郎さんのお話では、この石は、もと大谷坂にあったが、一度土呂八幡さんに運ばれたそうです。どうしてそこへ行ったか分からない。その後、上地八幡さんへ移転されました。

また、大谷坂は昔、「後見坂」とも言ったそうです。それは、吉良道を西のほうから来た人が、大谷坂に入ると、もう自分の故郷の山が見えなくなるので、後を振り返り振り返り見ながら通ったからだそうです。（上地町畔柳市太郎さん談）

「カワセミ大好きおばさん」からの手紙

六月終わりごろのことです。朝、いつものように教頭先生が交通指導をしていると、どこかのおばさんが、

「上地小学校の子供さんに見せてあげて下さい。」

とって一枚の写真をさしだされました。見ると、きれいなカワセミの大きなカラー写真です。（たて、よこ三十センチ）

「ありがとうございます。すばらしい写真ですね。どうされましたか。」

「じつはね。私が奥山田池でうつしたんですよ。」

とって、ご親切に次のような手紙もつけてくださいました。

上地小学校のみなさん。今日は。私は隣の緑丘学区に住んでいる「カワセミ大好きおばさん」です。みなさん、カワセミという美しい鳥を知っていますか。小鳥は、みなそれぞれ、すてきな洋服を着ていますけど、その中でも特にきれいで「動く宝石」と呼ばれているのがカワセミです。はじめて写真集でこの鳥を見たとき、おばさんは本当に驚いてしまいました。チルチル・ミチルのさがした、幸せの青い鳥ってこんな鳥かな？もしいるとしたら、山奥の水のきれいな川のほとりに、ひっそりと暮らしているんだ



カワセミ

など思っていました。

ところが、あれは去年の今ごろでした。みなさんの学校のそばにある、奥山田池のほとりを散歩していて、突然ばったり出会ったではありませんか。それからがたいへん。どうしても写真集でみたような写真を、自分のカメラでとりたくて、毎週毎週、日曜日のたびに朝早くから出かけ、六時間も七時間もがんばるのですが、何しろ相手は羽がありますから、逃げ回ってぜんぜんとれません。そのうちに、この池から急に姿を消してしまったのです。十二月の中ごろのことでした。でも、おばさんはあきらめません。冬の間中さがし回って、岡崎公園や菅生川（すごうがわ）にもいるのを見つけ、せつせと出かけましたが、やはりよい写真はとれません。

そして、春が来て、奥山田池にまたカワセミが帰ってきました。一年近く追いかけているうちに、鳥の心が、ほんの少しわかるようになりました。そうしたらやっと写真がとれました。途中であきらめないでよかったなど、とてもうれしくなりました。

みなさんのお父さんやお母さんが、子供のころは、カワセミはたくさんいたそうですが、一時、川のごれでへってしまいました。でも、みんながいっしょけんめい水をきれいにする努力をしたおかげで、今はまたふえて来たそうです。一人ひとりが川をきれいにするよう心がけて、どこの土地でも川でもカワセミが見られるようになったら、どんなによいことでしょうね。

岡崎市緑丘三丁目十八の六 白井 百合子

白井さんの小鳥にたいする愛情や、最後までねばり強くがんばられるお気持ちに、敬服いたします。学区外の方からも、こんなに親切にいただきました。ほんとうにありがとうございます。この紙面をお借りして、あつくお礼申しあげます。

流れる水は腐らない



● 上地旋風が吹いた

今年の小学校球技大会では、バレー部（女）サッカー部（男）とそれにバスケット部（女）が優勝しました。バスケット部（女）は、協会主催の大会でも優勝、したがって、優勝旗が四本となりました。こんなことは本校始まって以来の快挙です。開校以来の校訓「力いっぱい」が、言葉だけでなく、ここにも生きていますが、これも保護者のみなさまの、ご援助のおかげと感謝しております。

今まで、バレー部（女）の強さは伝統的で、定評がありましたが、他の部もそれに刺激を受け「バレー部に続けー」というわけで大いにハッスルしたのです。毎年、サッカー、バスケットは、今一步のところで優勝を逃していたので、うれしさはひとしおです。

よその学校では、球技大会で「上地旋風が吹いた」と専らの評判でした。上地っ子の「活力」がこれだけにとどまらず、学習面、生活面でもよい影響を与えることは間違いのないと思います。

この成果は、チーム全員の「汗と涙」のたまものであることは間違いありませんが、選手の人は、それを応援してくれたクラスメイトや、保護者の方の力を忘れてはならないと思います。

● 上地学区の勢い

バレーボール部が男女とも、愛知県代表として、全国大会へ出場することができました。東京体育館で、北は北海道から、南は沖縄まで全国の友達と、堂々の入場行進。監督の荒木さんも「どう見てもうちのチームの行進が一番うまいね。」と言われましたが、全く同感でした。

成績は別記の通りですが、精一杯悔いなく試合をすることができ、心から大きな拍手を送ります。特に、男子チームは、部ができて三年目にして全国大会への切符を手にしたわけです。女子のチームが苦勞して道を開いてくれたのですが、選手はもちろん、全児童が「やればできる」という教訓を学んでくれたことが最大の収穫でした。そして、学校の歴史に輝かしい一ページを残してくれました。

この大会へ出場にあたっては、学区総代会、社会教育委員会、PTA、諸団体のみなさまの絶大なご援助をいただきました。上地学区の方々の、学校にかける期待の大きさを、ひしひしと感じました。

厚くお礼申し上げますとともに、今後ともご期待にそうよう努めさせていただくつもりです。

● 朝礼子百反怒りのエネルギー

PTA会長の近藤さんが、以前から温めておられた素晴らしい企画が、会員のみなさんの熱意で、ついに実現したのです。これも総代さん、社会教育委員会のみなさんの、ご協力を得て、大成功のうちに終わりました。

PTAの役員さん委員さん、それに、自主的にお手伝いいただいた方、卒業生まで献身的に手伝っていただいたおかげです。空前のにぎわいと盛り上がり。企画、準備、運営と幾日も暑さを忘れて取り組んでいたが、そのファイトとエネルギーに敬服するしだいです。

「この親にしてこの子あり」といいます。上地の子供が明るく活気があるのも、こういうPTAの方々の積極性の反映にほかなりません。よい伝統をつくっていただいて、これまた、本校PTA活動の歴史に特筆されることと思います。

流れる水は決して腐りません。今後も豊かに、勢いよく上地の水が流れるよう、いっそうのご支援をお願いします。

科学部の楽しさ

土曜日のお昼時は、校内のあちこちで、ひときわ楽しそうな声が聞こえます。それもそのはず、部活動の子たちが、おいしい弁当を食べているのです。

そのうちに、食べ終わると、職員室へ先生を呼びに来ます。

「青木先生、早くきてよ。」

「うん、うん。」

「今日は大谷公園の虫つかみだったね、先生。」

「そうだよ。」

「早く生きたいなあ。先生、早くして。」

「わかった、わかった。でもタバコくらいゆっくり吸わせてくれよ。」

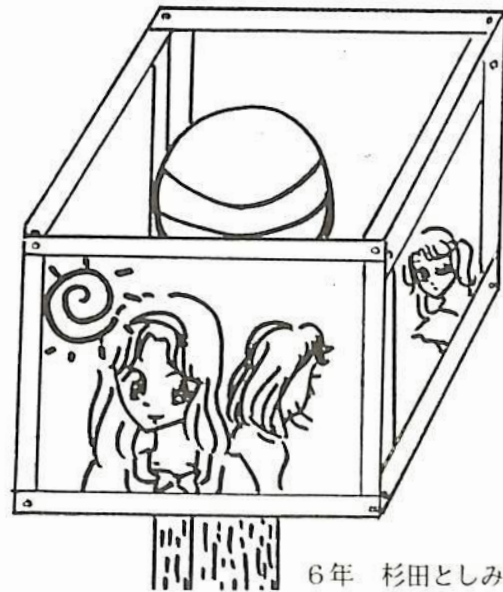
と、こんな調子です。

学習で、子供たちが迎えにくてくれる場面なんて、そうざらにあるものではありません。よほど楽しみにしているのでしょう。

そこで、科学部の代表の子たちに聞いてみました。

六年の杉田としみさん、小林幹也君、五年の深水祐介君、鈴木沢郎君たちです。

杉田「私が科学部へ入った時は四年生でした。先生は、時間をかけて、大きいものを作らせてくれました。家で役に立つもので、電気スタンドや送風機などです。今でも、この電気スタンドで勉強しています。」



6年 杉田としみ

小林「ぼくも工作が大好きだから、とっても楽しかった。工作のほかに、プールで先生のカヌーに乗ったのが楽しかった。あとで、少年自然の家でも乗ったけど、役にたつてよかったです。」

「今までに、どんなことをしたの。」と聞くと、みんなで答えてくれました。

「万華鏡も（まんげきょう）も作ったし、プラスチックを薬で固め、ペンダントも作ったよ。中へきれいな花や昆虫を入れてね。ゴキブリを入れて固めた子もいたよ。ハハハ。」

深水「弓鉄砲を作って、飛ばし大会をやったね。ぼくは十五メートルぐらい飛んで、一位だったよ。おもしろかった。」

鈴木「砂川へ魚をとりに行ったこともよかった。コイ、ドジョウ、ザリガニ、モロコ、ドンコ、フナなどがいっぱいいてびっくりした。貝もあった。拾って今でもかざってある子もいる。」

「最近はどういうことをやっているの。」

・今年に植物の葉をとってきて、葉脈だけにして、「しおり」を作った。葉の裏を顕微鏡で調べて、気孔も見た。

・畑でサツマイモを作って、やきいもでたべた。おいしかった。

・ヤママモ酒を先生が作ってくれて、飲ませてくれたよ。幹也くんは耳まで真っ赤にしていたよ。

・タンポポコーヒーを作って飲んだ。いいにおいがした。作りかたは、根をよくあらって、二センチくらいに切る。一、二、三日太陽でかわかす。フライパン、レンジなどである。これをコーヒーミルで砕く。あとはコーヒーを入れるときと同じ。

・山へきのことりに行ったよ。ハツタケを生まれてはじめてとった。

・大谷池へバードウォッチングに行った。マガモ、カイツブリ、カワウ、キジバト、モズ、そのほかいたね。

と、子供たちは目をキラキラさせて話し、話題は尽きません。

運動部に比べて、一見地味ですが、こんなに楽しい、素晴らしい活動もしているのです。

夢はでっかく

おかさきっ子展を前にして、どの学年も製作に大わらわです。

今年の作品は、例年に比べて、どの学年もひと味違っていきます。ありきたりの材料や、平凡なテーマではなく、よく工夫され、新鮮さがあります。

・一年『かわいい動物村』 軍手の中におがくずを入れて固め、目鼻をつけて動物の人形を作りました。めずらしい、かわいい人形のオンパレードです。

・二年『たのしい動物』 フェルトを切って、丸いペニヤにはり重ね、面白い動物の人形を作ります。世にもめずらしい動物ばかり。

・三年『こわい顔・おもしろい顔』（仮面）段ボールが材料。カッターナイフを初めて使って、仮面に作りあげました。伸び伸びして、迫力のある作品。

・四年『ぼくらの守り神』 マツボックリ、ススキ、木の枝など自然物に、空き缶、から容器などふんだんに使い、自由奔放に作りました。楽しくておもしろい「守り神」です。

・五年『やあ異星人たち』 廃品を分解して、新しく組み立てた画期的な作品。五年生で金物の工作に挑戦したことも異色です。
・六年『運動する友だち』 大活躍したスポーツの大会を思い出して、躍動する姿を彫金にして、卒業記念に保存します。六年生でなくてはできない作品。

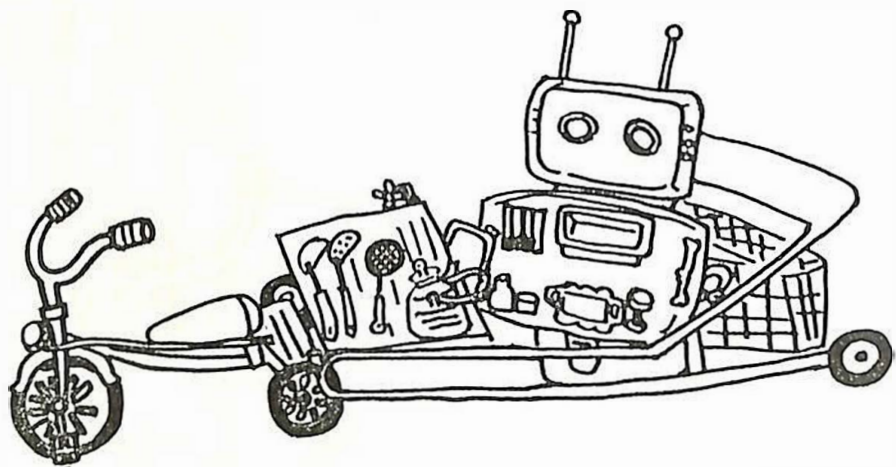
この中から、五年の共同製作『ぼくらの異星人』（金工）を紹介します。

今、どこにもあって、じゃまもの扱いにされている粗大ゴミや、廃材を集めました。古い自転車、こわれた掃除機、冷蔵庫、電気スタンド、録音機、自動車のタイヤ、三輪車、テレビ、ラジオその他、いっぱいありました。

毎朝、子供たちが学校へ持ってきました。大きくて重いのは、夕方、家の方が自動車で運んでくださいました。ご協力ありがとうございました。こうして、一週間ばかりで材料（廃品）の山ができました。学校へ来るお客さんが、みんな不思議そうな顔をして見ていきました。

子供たちは、もうじつとしておれません。自転車や三輪車など、乗ったり、引いたり、さわったり、転がしたりで大喜びです。こうしているうちに、一人ひとりの子供の頭の中に、作品のイメージがわいてくるのです。

こうして、八人グループで一つずつ、作り始めました。他の学年の子がうらやましそうに見ています。「何が作れるのかワクワクしました。」とか、「がんばっていい作品を作るぞ！」



「銀河食堂999」

5年 柳瀬 志穂

と日記に書いた子もいます。先生たちも「欲しいものがいっぱいあるなあ。まだ使えるぞ。」とか言って何回も顔を出します。「木や竹と違って、金を切ったり曲げたり、五年生では無理ではないか。」との心配も何のその、どんどんベンチやスパナを使い、ドリルで穴もあけます。金ノコで切断もします。(もちろんけのないように周到な指導をします。)

日記から、子供の声を聞きましょう

●「きょうは作品を作り始めました。最初に自転車のハンドルについているネジを取った。わたしはおもしろいものを作りたいなあと思った。ハンドルが動いて、次にタイヤをはずして、ちがう車の車輪をつけた。次に、もう一台の自転車を分解した。こっちの自転車もハンドルについているねじを取って、ブレーキも取った。それから、後ろのすわるところに、

あみのいすをとりつけた。(家城佑布子)」

壊すこと、分解することは、だれでもとてもおもしろいものです。テレビや時計など分解してみて、「へええ。」とか、「わあ、すごい」とか、あちこちで驚きの声が上がります。

その構造や仕組みを、初めて知った好奇心に溢れた目付き。一

人としてむだに遊んでいる子は見当たりません。みんな夢中です。そのにぎやかで活気のあること。

●「未来の乗り物・宇宙人をテーマにした作品作りを、昨日から始めた。ぼくたちのやつを作るのに熱中しすぎて、他の班のことなど気にしていられなかった。そしてしばらくしてから見ると、ぼくらの班はずいぶん出来ていた。(佐藤 卓)」

●「きのうはあんまりできなかったのですが、今日がんばりました。(ここはこうして・・・、ああよかった、こわれなくて、のように。) まちがえては大変です。しんちように、先のことを考えてやらなくてはいけません。はじめてドリルを使いしました。あながうまくあくか心配だったけど、あいたのでよかったなあと思いました。(渋谷麻記子)」

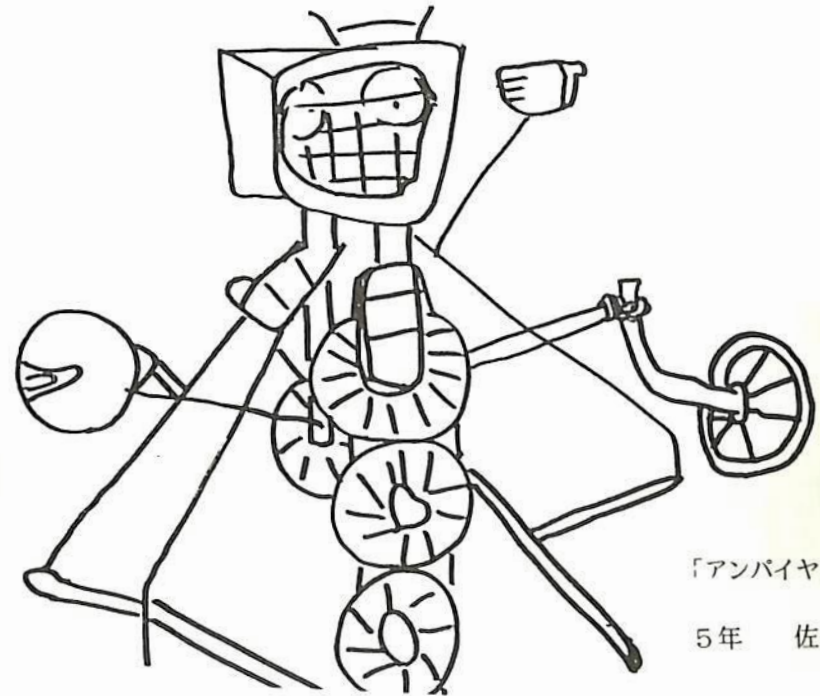
●「今日は図工がなかった。ぼくはたるかった。あんなにおもしろい物を作らないなんて、何度もこうかいしている。特にぼくたちの班はおそい方なので、今日はすぐくたるかった。早くみんなと作品を作りたいなあ(中塚健史)」

こうして、「がらくた広場」はいつのまにか「宇宙の夢製造工場」となりました。相手は、木や竹と全然違います。悪戦苦闘の末、やっと組み立て、形ができてきますと、また、新しいイメージがわいてきて、何度も改良しました。

大体できあがると、今度は名前を考えます。二十世紀の宇宙を夢見て、意見やアイデアを出し合います。英語の辞書で意味を調べるグループもあるほどです。

この名前やコメントを見て、また驚きました。すばらしく大きな夢があふれています。これは、大人の常識では、とてもまねすることができません。子供たちの意欲とセンスに脱帽です。以下、子供たちがつけた愉快な名前を紹介します。

「ウォーターストリーム号」「ギョロリン星人」「銀河食堂999(スリーナイン)」「歌って笑って健康車」「ミニパワフル・オートマチック」「カラヤン七世」「ツインサイクル」「トロンコカーと鍵盤君」その他いっぱいあります。こんな面白い作品、ぜひ見てやってください。



「アンパイヤ」

5年 佐々木涼子

「やったホームラン」

十一月の下旬。授業後の黒板には、下のようなカードがはってありました。これは、美化委員会が考えて作った「そうじコンクール」の成績カードです。おかげさつ子展で校内がよごれたので、「学校をもっときれいにしよう」という計画が美化委員会で提案されました。そこで、みんなで相談して、こんなチラシが教室に配られたのです。

そうじコンクールについて (美化委員会)

- ・目的 自分たちの教室をきれいにし、気持ちよく学習できるようにする。
- ・期間 十一月十九日(月)～十一月二十四日(土)
- ・点検 四時から
- ・項目 黒板／机／けい示板／ロッカーの中／そうじ道具／配ぜん台
／戸じまり／ようかん台／テレビ・ストープの周り／ごみ

これを受けて、自分たちの教室が、どうしたらきれいになるか話し合いました。いつもより真剣にやって、一年生でもホームランをとったクラスもありました。「先生！〇組はホームランだよ。」と真剣に教えてくれます。そうして、同じ方向へ帰る子が相談して、残って掃除をしていたクラスもあります。

点数でなく絵のカードというところがいいですね。横に「はげましのことば」も書いてあります。「さんねんです。ぞうきんがーまいおちていました。あしたはがんばってください。」と、なかなか厳しい審査ですが、親切的な助言です。また、「ホームラン、よかったね。あしたもこのちょうしでがんばってください。」と、いっしょに喜ぶことばもあります。おかげで、どの教室も、うんときれいになりました。

赤十字委員会ではベルマークを集めて、去年は竹馬をもらって大人気でした。ことしは七一、七三四点で、今までのと合わせて、約十万円ほどになりました。さっそく委員会を開いて、学校中でアンケートをとりました。

その結果、第一位が「ニューホッピング」、第二位が「さかあがり補助器」でした。みんな早く来ないかなあ、と首を長くして待っています。子供たちが喜んで遊んだり練習したりする日も近いと思います。

このような委員会の活動を、土曜日の全校集会で発表します。そのようすを日記(十一月二十五日)から拾ってみましょう。

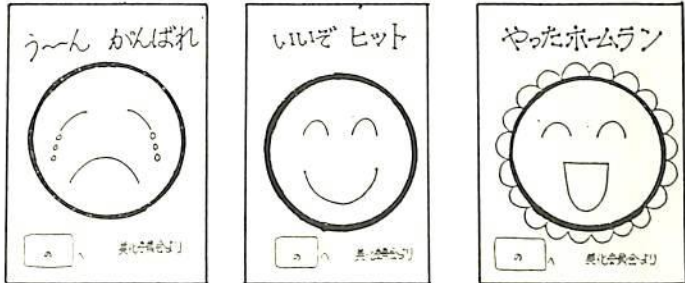
「集会」

五年 家城 佑布子

きょう、給食委員と、図書委員による集会があった。私は給食委員です。だから、私はきんちょうしました。私のやることは、TPを代えたりする仕事です。最初に「上地小すきなもの、きらいなものベスト三」の発表をしました。次にクイズや劇をしました。今度は給食のおばさんたちのようすや、牛乳や給食センターの車のようすをTPでうつつしました。さいごに、全校でキラキラ星のかえうたを歌いました。とってもおもしろい集会だったと思います。

委員会は、四、五、六年全員で構成し、委員全員で協力して活動しますが、中心になる委員長さんを紹介します。(順不同)

- ・給食(花田康仁) ・運動(小林有吾) ・安全(井口博) ・集会(杉山精) ・広報(小島賢二) ・緑化(鎌倉聖悟)
- ・保健(小林幹也) ・図書(小山倫代) ・放送(鈴木真一) ・美化(杉田としみ) ・赤十字(大北哲生)



手と脳はつながっている

一年生の子が社会科で「お手伝い」のことを勉強して、その体験と感想を書いてくれました。十一月下旬から十二月にかけて、一日に一つお手伝いをしています。どんなことをして、どう思っているのか、紹介しましょう。

◆トマトをきった。・タオルをたたむ。・おかあさんがあらったしよつきをかたづけた。・せんたくものをたたむ。・おさらをならべた。

「おかあさん、せんたくをたたむときや、しょくじのよういときは、わたしをよんでね。おてつだいぜつたいやるからね。

(一)の 一 うしだ あや(

◆ゆをわかったよ。・パンをはこんだ。・とうちゃんのふくへアイロンをかけた。・カレーをはこんだ。・せんたくものをたたむ。・モップをかける。

(一)の 二 ふじおか けいすけ(

「おかあさん、ぼく、よる、ごはんをはごぶからね。ぜつたいやるからね。」

(一)の 三 かみや よしみ(

◆くつならべ。・かいもの。・まどをあける。・たこあしハンガーにほす。・ごはんをくばる。・かいだんをふく。
「おかあさん、わたしは夕ごはんのとき、おはしや、おちゃわんをならべることを、まいにちやろうとおもいます。ぜつたいやるからね。」

(一)の 四 にしだ さおり(

◆ごはんをちゃわんにいれる。・せんたくものをたたむ。・おかあさんが、あたまがいたくなったので、かんびょうしてあげた。・せんたくものをたたむ。・そうじをしているよ。

「おかあさん、わたしは、まい日テーブルをふいているよ。それだし、せんたくを土ようびにやるんだけど、ときどきやって

ないから、ちゃんとやるようにする。」

(一)の 五 うめむら かよ(

◆じゃがいもむき。・きゅうりきり。・せんたくものをたたむ。・トイレットそうじ。・げんかんはき。・おちゃくみ。

「おかあさん、これからはむずかしいおしごとをやるからね。むずかしいお手つだいをがんばるからね。ぜつたいやるよ。

(一)の 六 うめむら かよ(

みんなお手伝いが好きですね。お母さんといっしょにやれるので、親子の対話ができます。お母さんの仕事の苦勞がよく分かり、思いやりの心も育ちます。うまくできないからといって、親がやってしまうのは、ほんとうの愛情とはいえませんが、お手伝いにはもうひとつ、大事な役目があります。それは、お手伝いをする事によって、手や体をよく使うことです。指先もよく使うようになります。

「手は突出した脳である」といわれます。手と脳は直結しているのです。これは、働かせることによって発達するのです。ですから、手を使うことや、体を動かすことによって、運動能力だけでなく、知的な能力も発達することになります。

ところで、近ごろ気になることがあります。子供たちに聞いてみると、「いちども、または、ほとんどしたことがない」「ことが、次のようにたくさんあるのです。

・タオルをしぼる ・卵を割る ・ちようむすび ・木登り ・ナイフで鉛筆をけずる ・果物の皮をむく

このようなことも、どんどん経験させてみて下さい。指先や脳の訓練とと思って、家中みんなでやってみましょう。続けると効果が大きいことは、多くの学者が証明しています。

「総代さん、ありがとうございます」

上地学区新年交礼会が、今年も勤労福祉会館で盛大に行われました。百七十人も参加していただき、ほんとうにありがとうございました。

柴田勝社会教育委員長さんも、成瀬司総代会長さんも

「学区・学校ができて、年々発展し、八年目が終わろうとしています。間もなく、記念すべき十周年がやってきます。皆さんの力を結集して、十周年の記念事業を成功させましょう。」

という趣旨の、力強い挨拶がありました。新年にふさわしいおめでたい話題を中心に、大勢の方が懇親を深めていただき、非常に有益な交礼会であったと思います。

さて、その席で、六区の総代の高柳金蔵さんが、にこにこして、ポケットから一通のはがきを取り出して、教頭先生に見せてくださいました。そして、こうおっしゃいました。「餅つき会のお礼の手紙が来てね。餅つきやしることを、こんなに喜んでくれると、張り合いがありますね。来年もやってやろうという気になりますねえ。」

では、その手紙を紹介しましょう。

「こんにちは。私は上地小学校六年一組の横田綾と申します。お知りにならないでしょうが、私は六区に住んでいます。終業式の日、小学校で最後の二学期の思い出は、おいしく広がるおしるこの味といっしょに、私の心の中にあります。毎年毎年、二学期の終業式の日になると、いくら寒くたって、少し雨が降ったっておしるこを作って下さり、ありがとうございます。そんな思い出が何回も思い出されます。私はこれで終わりだけど、来年入学してくる子、五年生以下の子たちのために、おいしいおしるこを、これからも作ってあげてください。」

二、三日したら、十区の総代さんの柴田賢治さんも、わざわざ学校へ手紙を持ってきて、見せて、こうおっしゃいました。

「こういう手紙を読むと、ほんとに嬉しくなるねえ。」

「柴田さん、十二月二十二日はどうもありがとうございました。とってもおいしいおしるこ、心の底から、とても暖まりました。寒さなんか、どっかにふっとんでしまいました。毎年毎年作ってください、とってもうれいです。少々の雨でも作ってください。いくら寒くても作ってください。終業式あとの、おいしいおしるこ。いつも楽しみにしています。今年でもう最後だけれど、何回も食べてきたのでしあわせでした。来年から、来れなくなるのは、とってもさみしいけれど、五年生以下の子や、新しい一年生の子も食べに行きます。上地っ子は、総代さんが作ってくれるおしるこがとて大好きです。では、十周年記念の計画がなばってください。十周年のお祝いとても楽しみにしています。(寺田 恵子)」もう一通、後藤賢一君もありました。

今の子供たちは、日本の伝統的な正月行事、餅つきを知らない。ひとつ私たちがついたり、子供たちにもつかせたりして、小学校時代のよい思い出をつくってやりたい、というわけで、総代さんたちが、餅米をといだり、火を燃やしたりするようなことまでやってくださいました。子供会の方も応援に駆け付けてくださいました。

将来、上地学区や、岡崎、日本を背負って立つ子供のために、というありがたい心が、子供たちにもよく通じているようです。こんなことをしてくださる学区は、ほかに知りません。温かい心とおしるこの甘い味は、終生どの子供も忘れることはないでしょう。そして、大きくなってからも「ふるさと上地」のよさを思い出してくれるでしょう。

いい土壌があってこそ、いい作物が成長します。上地学区という素晴らしい土壌に恵まれ、こんな総代さんたちに見守られ、上地の子供たちはすくすくと育って行きます。

「ぼく、おもちつきをやったよ。おもしろかった。」「おしるこ、五はい食べちゃったよ。」「ああ、おなかぼんぼん。ごちそうさま。」

三々五々、満足そうに帰って行く子。こどもの家で遊んでいく子。体育館へ急ぐ子。運動場で部活動の準備をする子。みんな目がキラキラしていました。

廃品の中から宝が

二月十一日に廃品回収がありました。

六年生の宮橋絵里さんたち（上地九区）も、集めに行ったところ、ある家で、「これを使って下さい。」とビニールの包みを下さいました。中には、新しい雑巾が十枚ほど入っていて、こんな手紙がそえてありました。

今日は朝早くから御苦労様です。てぬぐいとぞうきんは教室で使ってください。

二月十日

浅井

生徒さんへ

あくる日の朝、宮橋さんは、これを職員室へ届けてくれました。雑巾は今どきあまり見られない手縫です。一針一針ていねいにさしてあって、暖かい心が伝わってきます。物が有り余って、まだ使える物まで捨ててしまいがちな時代に、本当に貴重なものです。

この方は、上地三丁目のマンションに一人で住んでみえる「浅井君子」さんというおばあさんでした。職員朝会でも、このことが話題になりました。教室でも子供たちに話し、親切なおばあさんのことや、物を大事にする心などを話し合いました。上地小学校のために、こんなに親切にしてくださる方がいることを知って、みんな感激しました。どうしてもお礼が言いたい、と思った六年の寺田恵子さんは、おばあさんの家へでかけて行きました。でも、話していると長くなってしまい、おじやまになってもいけない」と思って、お礼の手紙をポストに入れてきたそうです。

また、学校からお礼の手紙と「学校だより」・「上地八景絵葉書」をお届けしました。

そうしたら、浅井さんが喜ばれて、こんな手紙を下さいましたので紹介します。

校長先生、教頭先生

先日、私のささやかな行為に対して、この度はご丁寧な礼状と、上地八景の絵葉書ならびに「学校だより」を頂戴いたし、本当に有り難うございました。

その上、十九日には、金子先生のご担当の寺田恵子さんから、私の雑巾と中のちょっとした手紙に、「寒い日でしたが廃品回収をやってよかった」と喜びあふれる御手紙をいただきました。

私は、今は高齢者の一人住いで、社会の皆々様に御世話になるばかりで、申し訳なく存じております。頂きました、「学校だより」を拝見させていただき、学区、ご父兄様方々の学校へのご協力を拝見いたし、感心致しました。そして、上地小学校のお子さん方々は、本当に立派な校風のお有りの事で、つくづく感心いたしています。学区でお子さんにお会いすると、必ず「こんにちは」のお言葉を、この老人にして下さるご立派な御しつけには感激感激でございます。どうぞ、お子さん方に、この喜びをお伝え下さいませ。いつか折をみて御校へお伺いしたいと存じます。その節はなにとぞよろしく御願い申しあげます。乱筆乱文にてお礼まで。かしこ

二月二十日

岡崎市上地三丁目八の十七

浅井 君子拝

このごろ廃品の値段が安く、収益はそんなに有りません。しかし、地球環境の汚染が問題になっている今日、地域の美化、資源再利用運動として、廃品回収の意味は大きいと思います。その上、子供たちが、学校で教えることのできない「心」も学んでくれて、本当にうれしく思います。浅井君子さんに、この紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

上地を支えてくださる方々

多くの方々が上地小学校を支えていてくださいます。その一端をご紹介させていただきます、紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

毎月一回、また行事があるたびに、美しい花が学校に届けられます。故小田裕司君のお母さんが、わざわざ豊川から持ってきて下さいます。玄関、体育館、教室などをかさって、みんなの目を楽しませてくれます。もう三年間も続いています。

福岡町の大河内克彦さん（大河内歯科医院）には、開校以来、毎年たくさんのお書充実費をいただいております。この大河内文庫を活用して、もう何百人という子供が、卒業していきました。

「ふれあい上地農園」は、総代会長成瀬司さんにお借りしています。貴重な勤労体験学習の場として、学校にはなくてはならない、生きた青空教室です。新しくできた生活科の学習でも重要な役割を果します。

社会教育委員長の柴田勝さんには、上地の文化財ともいうべき「上地開発記録」（八ミリ映画）をもとに、三年生全員に講話をしていただきました。ふるさとの変貌ぶりに、子供も教師も目を見張り、郷土への認識を一段と深めることができました。講話といえば、ブラザー印刷専務岡田一秀さんにも、卒業記念に「人生と紙風船」と題して、感銘深いお話を聞くことができました。紙風船を手にお聞きして、六年生は生涯忘れない一時を過ごすことができました。

丸井銑三さん（若松町石橋）には「イタリヤ風景」という、すばらしい絵をいただきました。また、絵かきさんとしての苦勞や、絵の心を六年生全体に、お話ししていただきました。子供たちも、丸井さんのアトリエに大勢お邪魔して、楽しくおしゃべりもしたりしました。

加納睦久さん（元若松東、現在岐阜県岩村在住）には「上地新開地」の絵をいただきました。上地の風土・歴史を知る上で、得難いものです。また、上地八景の絵葉書の原画も、ふるさとの心を込めて、快くかいてくださいました。

これらの絵は、一点とも正面玄関に飾ってありますが、情操教育の一環として、子供たちの豊かな感性を育ててくれるものと確信しています。

「ヤクシマヤギ」三頭、ふれあい牧場で人気を独占していますが、PTA副会長鈴木豊さんの、特別のご尽力によるものです。なお、このヤギの健康診断や治療には市役所の獣医、狩野弘生さんにお世話になっています。

バレエ部全国大会には、学区内外の各方面から、物心両面の援助をいただきました。バレエ部が今日あるのも、開校以来八年間、献身的な指導をしてくださる荒木洋一さん（緑丘一丁目）のお蔭です。言うなれば、荒木さんはバレエ部の恩人です。

また、大会にはいつも大勢の選手を運んでくださる、上地自動車学校さん、田中商店さん（上地六丁目）の蔭の力も決して忘れることができません。

上地の生き字引、小林吾一さん（上地町下屋敷）には、昔の上地の様子をいつもお聞きしています。学校だよりの取材にはいつも熱心に応じてくださって、感激しています。お幾つになられても、記憶力の良さ、確かさには驚かされます。

毎年三月になると、卒業を祝って餅米をくださる鈴木勲さん（上地一丁目）。このお蔭で、威勢のよい餅つき大会ができ、力餅を食べて卒業生は果立っていきます。このご厚意も開校以来です。

なかよし池にりっぱな色鯉をくださった鈴木昭男さん（上地三丁目）。鯉は元気です。大きな鯉が、毎日、上地っ子の歓声を聞きながら、楽しそうに泳いでいます。

今年の夏、初めて「親子夏祭り」があり、驚くほど盛会でした。これは、初代PTA会長松田千秋さん（上地四丁目）にいただいた、たくさんさんの延長用コードリール（照明用）が威力を発揮しています。

畔柳八百吉さん（上地町荒井）とは、もう三年間も交流が続いています。八百吉さんの温厚な笑顔は、学校中の子供が大好きです。いつまでもお元気で長生きをしてください。

社会科で必要な「昔の暮らしの道具」（わらじを編む道具）を、畔柳市太郎さん（上地町荒井）からいただきました。ちょっと手に入らない珍しい道具です。

手縫いの雑巾をくださった浅井君子さん（上地三丁目）は、物を大事にする心も一緒に教えてくれました。

奥山田池のカワセミの写真は白井百合子さん（緑丘三丁目）にいただき、理科の学習にとっても役立っています。

いつも二年生が見学に行くスーパードミー（上地店）の店長山下政義さん、いつも親切に案内してくださって有り難うございます。これからもよろしく願います。

このほか、ここにお名前をあげさせていただきませんが、多くの方にご援助をいただきました。平成二年度を終るにあたり、心よりお礼申し上げます。



三、教室の窓

「せんせい あのね・・・」

一年担任 岡本 きみゑ

「おはよう。」

にこっとしながら、

「せんせい、おはよう。」

七時半過ぎ、一番乗りの子供が教室に入ってきます。次々と、子どもたちが姿を見せます。かばんから、用具を出して、机の中にしまっていると、六の四の子どもたちが数名来てくれます。

「今日は、何をして遊びたい。」

「あのね、外に行きたい。」

「今日は、運動場でドッジをするから、みんな廊下にならんで。」

子どもたちは、にこにこしながら、教室を出ていきます。こうして一日が始まります。

子どもたちが入学して三週間あまり、ようやく上地小での生活のリズムに乗ってきました。活動範囲もだんだん広がってきます。長放課になると、子どもたちは中庭へと飛び出していきます。新しく出来たレインボータワーや大きな山が大きなようです。

●せんせい、あのね、

レインボータワーのね、ぶらぶらゆらすのがおもしろいよ。

●せんせい、あのね、

とりかごみたいたところまでのぼったよ。

●せんせい、あのね、

大きな山のところから、ころげおちちゃったよ。でも、へいきだよ。

教室に戻ると、赤白帽子をとりながら、遊んだことを話してくれます。額には汗がにじんでいます。ふれあい牧場も大好きです。

四月十七日、屋久島やぎの赤ちゃんが仲間入りです。飼育係の子どもたちに抱かれていたやぎにさわることが出来ました。おそろおそろ手を延ばす子、待ち構えていたように頭をなでてやる子・・・様々です。教室に入り、子どもたちに感想を聞きました。

●せんせい、あのね、

・あかちゃんのかおが かわいかったよ。

・あしをさわったらね、ぬくかったよ。

・けが あったかかったよ。

・けが さらにさらだったよ。

・おおきくなったら、ミルクのみたいよ。

みんな大笑いです。

次の日の朝の会。やぎの話から始まりました。

「やぎの赤ちゃん、みんなと同じ一年生ぐらいだよ。メーメーって鳴いていたね。みんなに何とお話していた。」

●せんせい、あのね、

・さみしいって。

・おかあさん。

・おかあさんのところへいきたい。

・はなれるのいやだな。

・これからどうかな。

子どもたちは感じたことを、すなおに聞かせてくれました。

遠足のある日も、子どもたちは放課になると、中庭で夢中になって遊んでいます。

帰りの会で「先生に話したいこと」を聞きました。

●せんせい、あのね、

やぎを見てきたよ。おすとめすを見つけてきたよ。つのがはえていたのがおす。めすはつのがないよ。

●せんせい、あのね、

えんそく たのしかったよ。あそんだところ、レインボータワーとそっくりのがあったよ。

子どもたちの話題は、中庭からどんどんふくらんでくるようです。

一斉下校の後、中庭のふれあい牧場をのぞいてみました。長坂先生と飼育係の子どもたちに話を聞きました。やぎが自分のおいをつけるまで小屋をあまり掃除しないで、そっとしておいてやっていること、チャボが卵を抱いていることなどです。

月曜日、子どもたちにちよっぴり話をし、また、子どもたちからどんな「せんせい、あのね・・・」が帰ってくるか楽しみです。



ヤクシマヤギのオスとメス

楽しく勉強 魚やの見学

二年担任 吉田 千鶴

「先生、魚が生きてたよ。」

「こんなに長いほうちよう、使ってたよ。」

「先生、ふぐがいた。」

「うなぎも、売ってたよ。」

子供たちが、少々興奮気味に、自分の見てきたことを報告してくれる。

社会の勉強で、魚やさんを見学に行った後のことです。授業の中で学校の外へ出かけて行くのは、初めてで、「みんな、ちゃんと見学ができるだろうか。」と、ちょっぴり不安を抱えながら、目指すドミイの中の魚やさん「みどりや」に向かいました。

まず最初に、店先に並べてある魚を見せていただきました。

「先生、この魚、血が出ているよ。」「これ、ピクピク動いてる。」

たくさんある魚に驚きながら、自分たちが考えてきた質問を魚やのおじさんにしました。魚の種類やとれる場所、血が出ているわけなどいろいろな質問が出ました。そんな中で、

「これ、何ですか。」

と、「はかり」を指差した子がいました。おじさんが、

「魚を乗せると、自動的に値段がつけられるんだよ。」

と、実演してくださいと、子供たちは、熱心にはかりの目盛りが動くのを見ていました。

次に、調理場の中も見せていただきました。魚を切っている様子が見たいと言っていた子供が多かったので、ここは注意深く見入っています。また、自分の家とは全然違う大きな冷蔵庫や包丁、まな板など見るものがたくさんあります。

その後、バックづめの魚や調理済みのものがあるコーナーも見せていただき、みんなの目と鼻が「焼きたてのうなぎ」に集中したところで、学校へ帰る時間となりました。

◇ 魚やさんのおじさんにいろいろきいたから、よく分かりました。中にはいつてみたら、ぼくが見たかったさかなのきりかたが見れました。

(二の四 佐々木章人)

◇ 長いほうちようがありました。おばさんたちは、何かダンボールにつめてはこんでいました。おじさんたちは、ほうちようで魚をきっていました。ぼくは、はたらいにいるおじさんを見て、いそがしそうだなとおもいました。

(二の四 白濱 伸悟)

◇ わたしは、おじさんに聞きたいことをかみにかいて、魚やさんに聞いて中を見せてもらいました。れいぞうこは、人間が入れるほどです。マグロはここにいっぱい大きかったです。イカはここに一つずつかさねてありました。クジラはみが赤くて、血のように見えました。タコは、足いっぱいになってはこにはいっていませんでした。社会の見学おもしろいです。

(二の四 早川 容子)

子供にとっては、頭の中で考えたことよりも、自分の目で見て、触れたものの方が必ず心に残るものです。この見学でも、教室の中とはまた違った表情が、いろいろな所で見られました。受け身ではなく、目的を持って自分から働きかけることが、意欲的な学習態度にもつながることでしょう。そして何よりも「楽しく勉強できる」というのがいいことです。

子供たちが、「楽しく勉強」できるように、またどこかへ出かけて行きたいと思います。



「けっちゃん」は楽しい遊びの代表だ

三年担任 松坂 禎文

三年生になってすでに二か月になろうとしています。その間に子供達の放課などの様子を見てみると、いろいろな遊びがありました。

「先生、けっちゃんやっていい。」

給食を食べた後でも、掃除が終わった後でも、ひまをみつけると聞きに來ます。四月以來、もっとも人気のある遊びは「けっちゃん」です。ほかの呼び方もあるようですが、子供たちは「けっちゃん」と言っている。消しゴム落としといってもいいでしょう。

遊び方は、机の上を範囲とし、その一角を自分の陣地として相手の消しゴムを落とします。そんな光景が教室のいたるところで見られました。そして、一対一ではおもしろくなくなったのか、三人になり、四人戦へと発展していきました。

この遊びがはやりだと、消しゴムを十数個も持つてくる子供も表われ始め、みんなで消しゴムの品評会にも成ってきてしまいました。

消しゴムには、いろいろな色や形がある。

消すたびにちっちゃくなって

けっちゃんのほんしょうとかで

あげたりもらったりする。

みんなが喜ぶ遊び、けっちゃん。

(三の二三谷 知絵)

何気なくこの遊びを見ているだけだと、ただ消しゴムを指で弾いて当てるだけじゃないかと思ってしまいますが、実際に子供の中に入ってやってみるとなかなか難しいものです。はじく力加減や滑り具合も分からないし、止まった位置が悪いと弾きにくかったりするので。それに当てようとしても、なかなかねらった方向に行きません。笑ってごまかすしかありませんでした。

その点、子供は何回も遊んでいるだけあって、それなりの作戦を考えてやっているようです。少しずつ相手に近付いて行く戦法。一気にねらっていく戦法。それらを合わせた戦法など、相手や自分の消しゴムの大きさを考えあわせたり、今はこうしただから次はこうだと考えています。

また、ある程度のルールもあります。消しゴムの向きを変えてもいいよということ。子供たちも経験から、角よりは平なところのほうがはじきやすことは、分かったようです。ほかには、机から落ちてしまったときは自分の陣地へ戻ること。両方が落ちたときは、両方とも陣地に戻るようになっていきます。



3の2 小幡 朋史

けっちゃんとき、みんなを消しゴムで倒せるから、楽しい。尾上君がぼくに勝ったり負けたりするので、悲しかったり、うれしかったりして、ほんとうにけっちゃんはいいものだ、というところが頭からはなれません。

(三の二 森田 大輔)

このように、机の上でしていたのですが、四人で遊ぶのは狭くなったのか、教室の床のマス目を使い、範囲を決めてやるようになってきました。こうなると、寝転んだり、四つん這になつたりして、机上でやっているときよりものびのびと遊ぶようになりました。様子を見たり、応援する子の輪ができて、二重、三重と取り囲んで、歩くところがなくなってしまふこともあります。また、子供の目が真剣になっているから、見ているほうも楽しくなってきました。

けっちゃんは楽しい。下のゆかの所でやる。よくすべってやりやすい。ぼくは、たいがい九マスでやってけっちゃん早くつかないようにして遊ぶ。たまには四マスでやる。九マスでも一回たおしができるが、四マスでもやるのは、とてもかたんに一回たおしができるからです。ぼくは、いっぱい消しゴムがあるので、弱い消しゴム、強い消しゴム、いろいろ使つて遊びます。

(三の二 尾上 佳宏)

ところが、楽しいことばかりではありません。勝負が関わってくると問題が出てきます。言い合いをしたり、遊んでいる所へ割り込んだりすることもしばしばありました。そのたびに、先生を頼ってきますが、もっとルールを考えるように言っています。

最近では、体を思いっきり動かすようなおにごっこやドラゴンクエストごっこなどでも遊ぶようになってきましたが、やはり「けっちゃん」の人気は衰えません。今では廊下までが会場となってきました。

子供の中から生まれた楽しい遊びに、これからも注目していきたいと思います。

歌声の響く教室に

四年担任 富田 尚子

昼の校内放送で子供たちの知っている曲が流されると、大騒ぎです。口の中にいっぱいおかずを詰め込んだまま歌いだす子が続出するのです。

昨年からの持ち上りのこのクラスは、みんな歌が大好きです。

「今度ね、音楽の研究授業をやるよ。」

「えーっ！」

「やだあー。」

□々に文句を言いながらも、目は輝き、何やらうれしそうな様子でもありました。三年生の時から、毎日帰りの会で歌っているせいか、歌うことには少々自信を持っているのです。しかし、実際は、というと、元気は有り余っているものの、声を張り上げ、どなってしまふのが現実。何とか歌好きな子供たちを美しい合唱に触れさせたいと思い、遊びを取り入れながら合唱の授業を進めていきました。

(合唱遊びをして)

・おもしろいつていうか、なんか音がきれいです。(柴田 朋保)

・かっこいい。音楽の時は毎回やりたい。(三浦 紘子)

・遊びみたいでけっちゃんおもしろかった。(清水 基広)

ド・ミ・ソ・ドの四つの音を組み合わせる歌なのですが、初めはなかなかうまくハーモニーしませんでした。しかし、コー



小野 勲

ラスグループのように手振りをつけてやるうち、子供たちは次第に乗ってきて、代表でやりたいと言い出しました。

・一人でやるのはちよつとはずかしいし、まちがえるとはじをかくけど、やってみたかった。
(畔柳 愛香)

・四つの音がまざり合ってきれいでした。みんなの声が一人一人ちがうけど、みんなはこういうのは出せるから、ちがう合唱遊びがやってみてみたい。
(別所 理子)

「声を合わせること」の面白さが分かってきたらしめたものです。その勢いで研究授業の曲「こどものせかい」へと入っていききました。

研究授業の当日。担任の私の不安と緊張をよそに、子供たちは元気いっぱい。
ばい。

「校長先生、見に来てくれるかなあ。」

「何人ぐらい見に来るの?。」

前の時間、音楽室の壁に大きな虹の絵を貼りながらも歌を口ずさんでいました。

多くの先生方に見ていただき、初めは緊張気味だった子供たちも、「友だちシンドバット」「こどものせかい」と歌うにつれてリラックスしていき、顔つきも歌声も明るくなっていききました。「こどものせかい」の合唱

も、うまさを増していき、どの子も歌ったんだという満足した表情。歌の苦手な男の子や、ふだん声の小さい女の子も一所懸命に歌い、きれいなハーモニーが生まれたのには感激でした。とにかく、誉めて、誉めて、誉めまくりました。

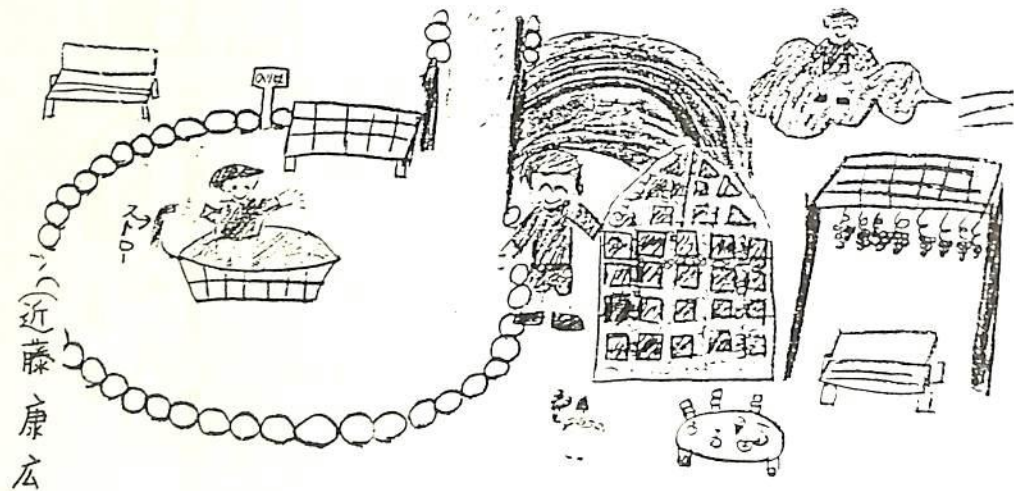
・「こどものせかい」は、ろく音したり、何度もくり返したり、「ラ」で歌ったりしました。そして、二組の心が一つになり、いい声が聞こえてきました。ぼくは、なかなかうまく歌えました。(辻村 登)

・きょうは前よりすごくよくて、どならないでできました。そのせいかがあって、校長先生から百点満点がもらえました。(茂刈 雄二)

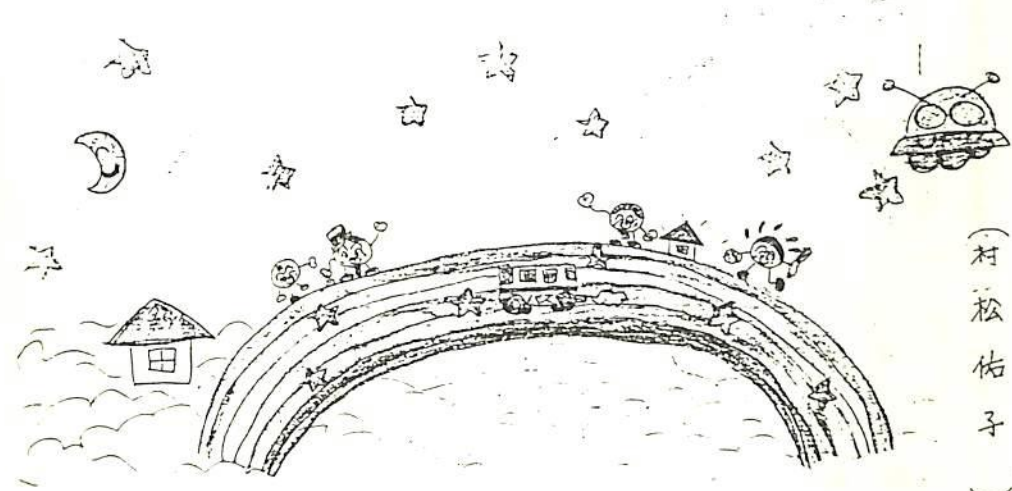
・歌を歌う時は、力いっぱい歌えた。すごく楽しかった。(稲吉政貴)

授業後、校長先生に百点満点をいただいたことが子供たちにとって最高にうれしかったようです。その日の午後は、ジャガイモ掘りでしたが、「頑張って歌ったから、こんなにたくさんのおいものがとれたんだね。」というつぶやきが印象的でした。

この満足感を、これからもいろいろな合唱曲で与えていきたい。そして、いつもすてきな歌声の響く教室でありたい、と思います。



(近藤 康広)



(村松 佑子)

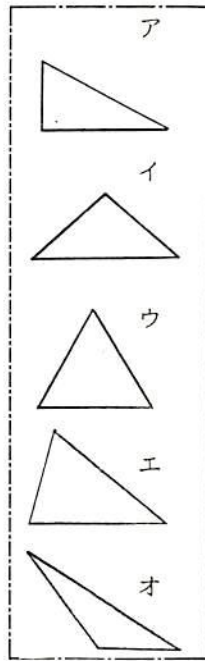
算数の楽しさを味わう

五年担任 太田 恭子

今回の指導要領の改訂において、算数科では、『よさ・美しさ』ということが強調されています。

では、算数の『よさ・美しさ』とは、いったいどのような意味があるのでしょうか。次の問題を一緒に考えていきましょう

例題1 *合同な三角形は、平面に透き間なく敷きつめることができるでしょうか？

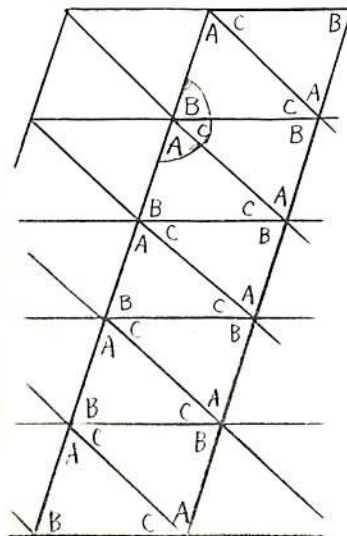


*ヒント1 上の三角形の中から、どれか好きな三角形をひとつ選んで下さい。
*ヒント2 合同な三角形を十〜二十個切り取って、並べて下さい。

授業の記録 (Cは児童 Tは教師)

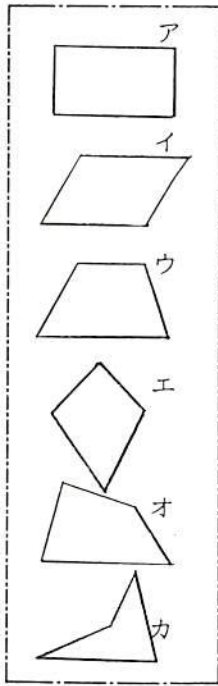
C1: どの三角形も平面を敷きつめることができたよ。
C2: 何かきまりがあるみたい。
C3: 平行につながっていくよ。
C4: 一つの頂点に集まった角は、A、B、Cの三種類
C5: A、B、Cが集まると直線になる。
T1: もう一度、よく見てごらん。直線は？
C6: あっ そうか。ABCが集まって百八十度になるよ
C7: 三角形の三つの角をたすと百八十度ってことか！

<エの場合>



子供たちは、合同な三角形を平面に敷きつめていくことから、「三角形の内角の和が百八十度」であることを自分の手で見つけていきました。今までに習ったことを使っていくと新しく習うことも自分の力で『大発見』できるのです。これが算数の楽しさであり、やる気につながるのだと思います。さて、次の問題に移りましょう。

例題2 *合同な四角形は、平面に透き間なく敷きつめることができるでしょうか？

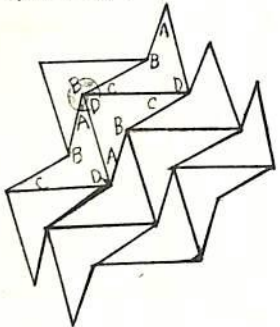


*ヒント1 長方形や正方形は簡単ですね。台形はどうでしょう。
*ヒント2 三角形のときと同じ様に何かきまりが見つかるといいかな？

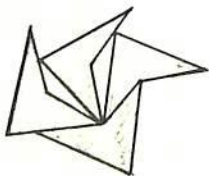
オ、カの図形はなかなか難しいですね。でも、皆さんも一度挑戦してみてください。正解は、敷きつめられるのですが、どのように並べていくのでしょうか。うまくいったときには、ちょっとした感激だと思えます。子供たちはこんなふうに考えました

C8: 先生、カでもできるよ。ちゃんと敷きつめられるよ
C9: 変だな。ぼくはできなかったよ。透き間が空いちやったよ。
T2: 二人の置き方を比べましょう。違いがあるかな。
C10: 四角形もきまりがあるはずだよ。
C11: 敷きつめられるときは、やっぱり三角形のときと同じ様に一つの頂点にA、B、C、D4つの角が集まっているよ。

<カの場合>



<失敗例>



C 12 .. 今度は、ぐるっと一周り分だから三百六十度だね。
 C 13 .. じゃあ、四角形の角の和はどれも三百六十度になる
 T 3 .. みんなは、すごい！また『大発見』算数博士だ！

このまま話し合いを続けていけば、子供たちは、どんどん新しいことを発見し、新しい疑問に挑戦していきます。三角形の内角の和だけでなく、四角形の内角の和が三百六十度であることも見つけ出しました。

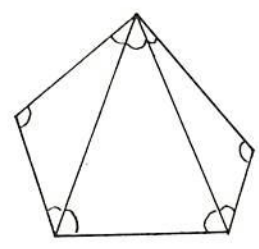
この後、「では、『五角形は平面を敷きつめられるかな？』と例題3に移ってしまいがちですが、子供たちの思考力にゆさぶりをかけるのも大切なこと。話題を『内角の和』に移していきましょう。

例題3 *五角形の内角の和は何度でしょうか？

*ヒント1 自由に図を描いてみましょう。でも、分度器で測ったらダメ！

*ヒント2 三角形は百八十度・四角形は三百六十度。となればたぶん五角形は・・・理由も自分の言葉で！

C 14 .. 五百四十度です。訳は、百八十度ずつ増えているからです。
 C 15 .. 四角形は対角線を引くと三角形が二つになった。五角形は三つになります。
 C 16 .. 三角形一つで百八十度だから、二つ(四角形)で三百六十度 三つ(五角形)では五百四十度となっていきます。
 T 4 .. またまた『大発見』三角形に区切るのはいい考えだね。

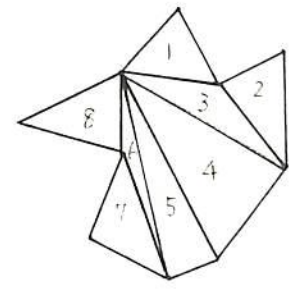
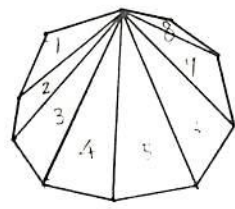


例題4 *次は、・・・六角形といたいけれど、みんなは大発見者だから、十角形の内角の和は何度でしょうか？

*ヒント1 自分の能力を信じる！

*ヒント2 規則性を思い出して、公式が作れるといいな。

C 17 .. 千八百度です。
 T 5 .. どのように考えたの？
 C 18 .. $180 \times 10 = 1800$ です。
 C 19 .. 反対。三角形は(図を描きながら) 8個できるので $180 \times 8 = 1440$ です。
 C 20 .. 三角形は、二つずつ少なくなるんだ。
 C 21 .. そうだったじゃん。公式ができるぞ。
 C 22 .. 四角形の内角の和は、 $180 \times (n-2)$ となるよ。
 C 23 .. 先生、もっとやりたい。問題出して。
 T 6 .. ようしとっておきの難しい問題だ。(例題5へ)



☆このように子供たちが思考実験をしていくうちに、きまりを見つけ、公式化していくこと。

☆今までに習ったことをもとに、自分の手で新しいことを見つけていくこと。それらが、

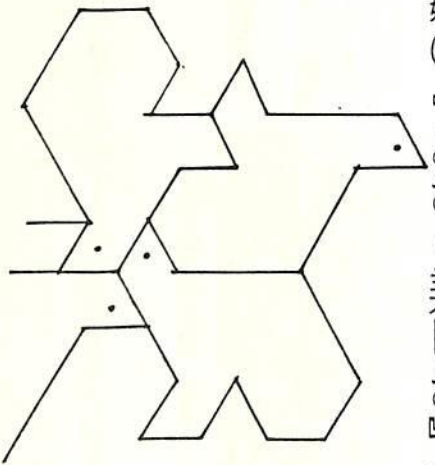
算数数の『よみかみ・美しきかみ』です。

さてみなさん、今日のおさらいです。ぜひ挑戦して下さい。

例題5 *十二角の内角の和は？

例題6 *合同な五角形は平面を敷きつめられるか？

例題7 *下の形は平面を敷きつめることができます。なぜでしょう。



5年算数 教科書P.78より

絵本と六年生

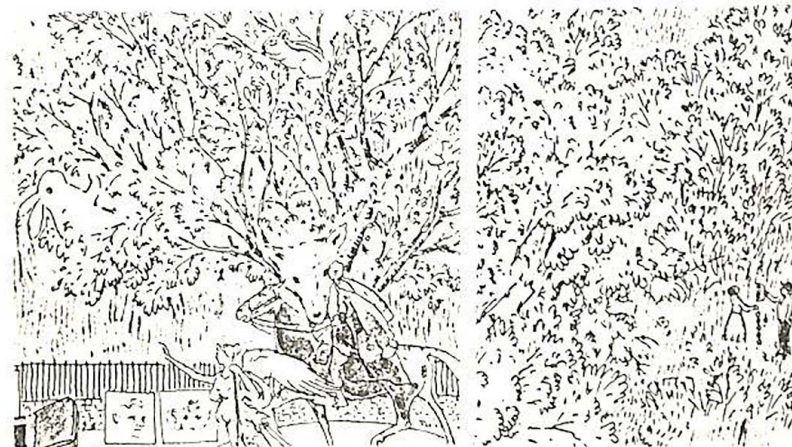
（文字のない絵本から）

読書の秋です。読書というど部厚い本を連想して「嫌だ。」と拒否反応を示す人もいます。そこで、おもしろい本を紹介しましょう。

安野光雅作『旅の絵本』です。文字が一つもありません。ところが、一人でも二人でも長い時間楽しめま。それは、本の作者、安野さんがいたずらおじさんで本の中にいろいろなものをいっぱい描き込んだからです。

六年四組の子は、『旅の絵本Ⅳ（アメリカ編）』の中で次のようなものを見つけました。もちろんこれはほんの一部です。全部で百以上の発見をしました。

- 景・木に動物が隠れている。（約二十五匹）
- 3・有名な絵はマドンナ（本当はマリリン・モンローだが似てる）かな？
- 1・右下の二人は「くしと時計の鎖をプレゼントする話（愛の贈り物）」だ。
- ・建物が日本の国会議事堂とにている（いい感してる！）。
- 景・去年の組み立て体操「オズの魔法使い」の四人がいる。
- 4・チャップリンがいた。
- 1・このページだけピンクの木（桜）があるのは、なぜかなあ？
- ・警察官と話しているのは、こじきだと思えます。

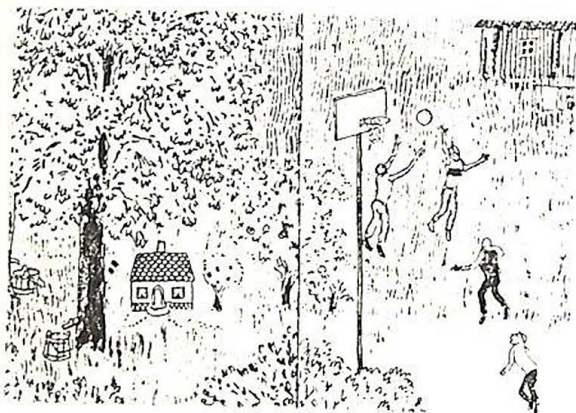


旅の絵本のさしえの一部

六年担任 土屋 恵子

アメリカの風景や歴史の人物は大人でも難しいところですが、なんだかおかしいなど感じるだまし絵や木の中に描かれている動物などは小学生が十分楽しめます。スヌーピーやスーパーマンも見つけてみんなにやにやにやっています。前ページの絵と連続している絵もあります。簡単なものを探せばいいと指示しておいたのですが、M君は百科事典を持ってきて見比べだしました。二時間探した後は、うなずきあったり驚いたりする楽しいの班ごとの発表をしました。子供達の感想を聞いてみました。

- ・こんな本があったなんて知りませんでした。初め難しいと思ったけど、探しているうちにもしかして夢中になりそうでした。（美紀）
- ・思ったより難しく、とてもおもしろい本だった。（貴彦）
- ・こんなにいっぱい（だまし絵など）があるとは思わなかった。（実佳）
- ・木の中の動物探しは疲れたけど、楽しかった。（恭之）
- ・変なものもいろいろあっておもしろかった。（博之）
- ・思っていたよりたくさんのおもしろいものが隠れていてびっくりした。（直子）
- ・いろいろな物語などがいっぱいあって、探すのに苦労したけど楽しかった。（雅紀）
- ・不思議なものがいっぱい出たのでおもしろかった。（幹也）
- ・妙なところに何かあり、どきどきしながら考えた。（千文）



日本傑作絵本シリーズ（福音館）

この後、教室では『旅の絵本』に出てきた絵本や本を読んだり、文字のない絵本『ウォーリーをさがせ』を熱心に読む姿が見られます。

読書週間にあたって

一年担任 松本 博子

スタンドの灯りをつけ、本のページをめくりながら、秋の夜長を過ごすのに、絶好の季節となりました。折も良く、十月二十七日から十一月九日までが、『読書週間』にあたり、子供たちにも、何とか本に親しんでくれればと考えていました。朝の会で、日直が今読んでいる本の紹介をする場を設けたりと、四苦八苦していました。

そんな時、職員にプリントが配られました。目を通してみると、「読み聞かせ週間」と題するもので、一クラス一時間、校長先生が子供たちに本を読んでくださるという内容であった。こんな企画は初めてのことで、いささか驚いてしまいました。クラスに戻り、「十月二十三日の三時間目に、校長先生が本を読んでくださるよ。」と話すと、子供たちは目を丸くしてびっくりしていました。待ち望んでいたのか、当日、十数人の子供が先生をお迎えに行くほどでした。その「読み聞かせ」の様子は、

きょう、こうちょうせんせいですが、三じかんめに一の三のきょうしつにきて、本をよんでくれました。『どろぼうがっこう』は、うちでもよんでいます。もう一さつは、『ちびくん』という本で、「ちがうもん。ちがうもん。」がなんかいも出てきて、おもしろい本でした。・・・(以下略)

(はんだちぐさ)

というように、二冊の本が気に入って、自分の手元に置きたくて、買い求めた子もいるほど、「読み聞かせ」の効力がうかが

われました。

担任も、本を「読み聞かせる」ことをしなければいけないことを確認しました。

校長先生に続けとばかりに、一年の学年で読書週間の第二弾を計画しました。それは、『ぼくのわができた』を読み聞かせ、葉書にその感想文を書くというものであります。父兄に宛名を書いていただいた葉書に、子供たちが手紙形式で感想を書きました。



カロリーネさん、すてきなおにわができてよかったね。じゃがいもやにんじんとか、おはながすきなんだね。わたしもすきだから、おうちでそだてているんだよ。とってもきれいだよ。おかあさんが、おはながすきでうえたんだよ。なつやすみのとき、トマトやナスもうえたけど、もうかれちゃった。もったいないけど、すてちゃった。でも、こんどなつになったら、またうえるのたのしみだな。おかあさん、おはなをとってもだいじにしているんだよ。カロリーネのそだてたおはな、とってもたくさんあってきれいだね。大きくなるのがたのしみだね。とってもながいおはなで、おもしろかったよ。

(いさかみほ)

主人公と同じように、家の庭でいろいろな植物を育てている子供にとって、共感した内容でありました。しかし、話が長か

ったこと、植物に興味のない子が多かったことから、大半の子供はじっくり聞けませんでした。一年生は、短くて楽しい本のほうが興味を示すようです。

読書週間の第三弾として、十一月八日に、学年で読書集会を計画しました。

きょう、一ねんせいだけのしゅうかいがありました。はじめに、一ねん二くみの人が、みんなでつくった大きな本を見せてくれました。その本の代いは『みんなでつくっちゃった』です。

つきに、こうちようせんせいがおはなしをしてくれました。ごろちゃん(さるの人形)もつれてきてくれました。

つきに、『ぼくのわができたよ』のかんそうをよんでくれました。三くみでは、井坂さんがよんでくれました。

さいごに、えいがをみせてくれました。一こ目は、なにかわすれたけど、とてもおもしろかったです。二こ目は、『きつねのこんとたぬきのぼんた』をやりました。二こ目もとてもおもしろかったです。どっちもおもしろかったから、くらべられないです。

とてもおもしろかったから、もっとやってほしかったです。

(すずきかおり)

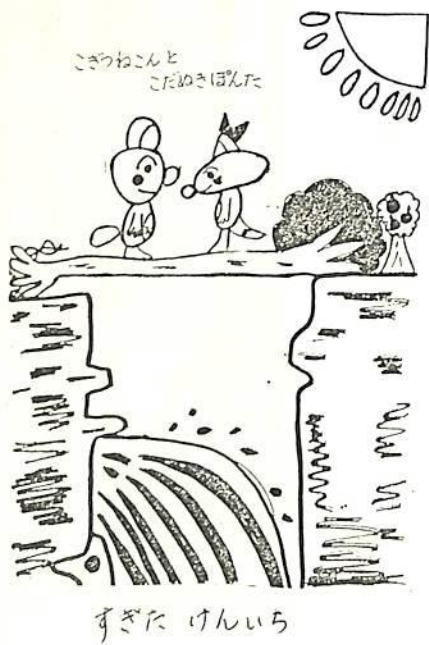
校長先生が登場した時、子供たちから、「どろぼうがっこうの本、読んで。」という声があちこちから上がりました。校長先生の「読み聞かせ」が忘れられないのでしょうか。この集会で、「読み聞かせ」を取り入れなければいけなかったことが反省させられます。

平日本を読む	いつ読むか	帰る時間	すぐ前後	4人
読む人	よまない	28人	ごはんの前後	4人
休日本を読む	読む	13人	よる前	1人
	よまない	20人	よる後	3人
お母さんが読んでくれる	なぜ読まない	時間がない	18人	
よんでくれる	よんでくれない	18人	2人	
家で本を読まない、読んでくれない				
9人				

読書週間にあたって、校長先生の企画、学年の企画と押し進めましたが、学校の図書館の利用状況を見ると、まだ少ないようです。その理由を考えると、子供には読む時間がないようです。学校にいる間に読む時間といえば、雨降りの休み時間だけです。

帰宅後の家での様子を聞いてみますと、上の表から分かるように、時間がないから読まない子が十八人もいました。遊びに夢中、塾へ行かないといけなから時間がないということのようです。

とすれば、家で、読書タイムを設け、まず「読み聞かせ」から始めてはどうでしょうか。学校と家庭で、同時にスタートしましょう。



三十四人のビーバー、ダムを作る

二年担任 柴田 美香

「先生、こんなにたくさん取ってきたよ。」

山のように積まれた木と石を自慢そうに見せる子供たち。走って集めて来たのだろう。

「はあ、はあ。」いって、顔を真っ赤にしている。班に分かれてダム作りの材料集めをした時のことである。

国語の説明文「ビーバーのす作り」の学習。

初めに、ビーバーが歯で木を切る様子を学習し、次に実物大のビーバーの絵を描いたりして、ビーバーの体のつくりを学習し、その日は、ビーバーが木と石とどろを使ってダムを作る様子を学習した。子供たちにとっては初めて知ることばかりで、驚くと同時にとても興味を持って学習に取り組んでいた。

「明日は、みんながビーバーになって、本当にダムをつくってみようか。」

「瞬びっくりして、ぼかんとする子供たち。でも、すぐに、

「うん。でも、どこに?」

「プール?」

「運動場?」

と聞く。それはちょっと無理なので、実験室のバットの中に、木や石、どろの代わりに粘土を使ってダム作りをすることを話し、子供たちは班毎に材料集めにかけた。

材料集めが終わり、教室に帰ってきた子供たち。もう、作りたくて作りたくてたまらないらしく、

「先生、もう今からダム作ろうよ。」

「うん。先生、作りたい。」

と言い出す。

「そうかなあ、そんなに作りたい?でも、そのやる気、明日までとっておいてね。」

そして、その翌日。待ちに待ったダム作りの時間である。初めに、ビーバーのダム作りの様子を思い出した。

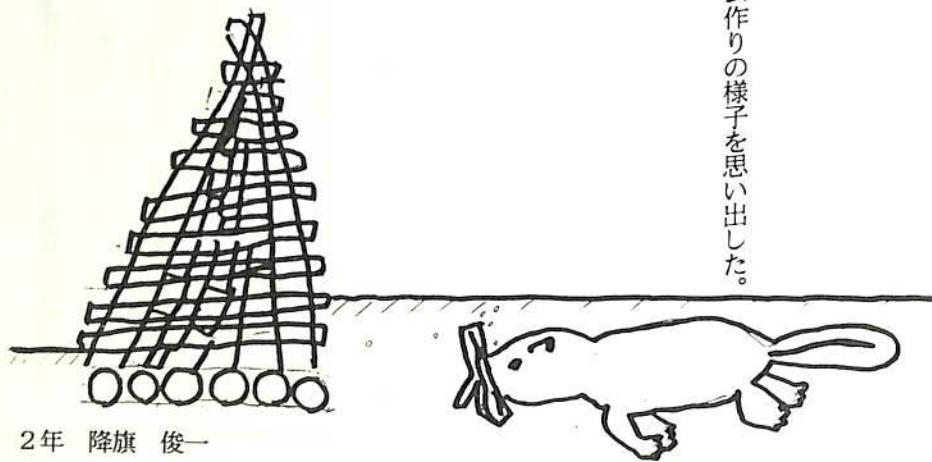
目当ては

ビーバーになって、力を合わせてダムを作ろう

である。

班毎に集めた山のような材料を使って、ダム作りを開始。木を折る者、並べる者、粘土をこねる者、石を置く者など協力して行なっている。しかし、なかなかうまくいかない。木が倒れたり、隙間だらけになってしまったり、試行錯誤しながら、それでも一生懸命作っている。

まず、子供たちは、つるつるのバットの底に粘土を敷き、川底と同じ状態にすればうまくいくことを見つけた。それから、自分たちの探してきた木と石を使って、どう



2年 降旗 俊一

したら隙間を埋めて水をせき止めることができるか必至である。

(本当に子供たちだけで考えて、ダム作りができるだろうか。)

心配されたが、どの班も苦心の末、なかなかりっぱなダムができて上がった。子供たちも一安心。

「さあ、ダムに水を入れていくよ。」

自分たちの班のダムに水が入られるのを、ものも言わず、祈るような眼差しでじっと見守る子供たち。

「わあ、水が流れて来ない。」「あっ、せき止めてる。」

うまくいった班から歓声があがる。

「あーあ、水が流れてきちゃった。」

とても残念そうな声もする。

大成功の班、ちょっと失敗してしまった班、いろいろな班があったけれど、自分たちで作った小さなダムを目の前にして、どの子もダムの役割がよく分かったようすであった。

いろいろ考えて協力してよくがんばった「ダム作りの天才」三十四人のビーバーたち。「ビーバーのダム、す作り」という驚くべき仕事を体験して、自然の偉大さ、奥行の深さに少しだけ触れることができたのではないかな、と思う。

ダム作り

降旗 俊一

○よかったこと

すぎまがないから、水がせきとめれた。

みんなで力をあわせた。

○なおした方がいいところ

大きい石をこまかい石にすればよかった。

ダム作り

壁谷 建史

○よかったこと

少し水をいれたときは、出なかったこと。

○なおした方がいいこと

すぎまがありすぎたこと。

○思ったこと

みんなと力を合わせてやった方がよかった。

マラソンのどこが楽しいの？

四年担任 小田 英宣

寒い季節になると、子供たちが意識し始めるマラソン。マラソンという競技はただ走るだけの単調な運動であり、また苦痛を伴います。そのために、子供たちには、あまり人気がない運動のようです。持久力の乏しい子供にとって、これほど嫌なものはないでしょう。実際、私のクラスの半数ほどの子供が、マラソンは嫌いだ、と答えています。

・マラソンはいやだ。苦しくなったり、つかれるだけで、何もいいことがないから。
・つかれてへとへとになる。風がふいて、寒いし、苦しくなる。どうしたらマラソンが好きになれるか、わたしには分かりません。

(子供の感想より)

しかし、この不人気なマラソンは、小学校ばかりでなく、中学校、高校と子供たちに付きまとうのです。これには、それなりの理由があります。マラソンにも、次のような良い点があります。

- ① 心肺機能を高めることができる。
- ② 足・腰を鍛えることができる。
- ③ 走り抜くことにより、勇気と自信を持つことができる。
- ④ 個人差を認め、励ましあって、自分の能力を引き出すことができる。
- ⑤ 走ることの楽しさを肌で感じることができる。

身体の発達段階を考えると、まだ、小学生ということもあり、①②よりも③④⑤を重要視しなくてはならないでしょう。このマラソンの良さを、子供たちにも知ってもらおうと、マラソンカードを作りました。五十メートルごとに一つのマーク

を塗り潰せるといった、簡単なものでしたが、カードを使い始めると、子供たちは一斉に走り始めました。朝、教室に行ってみるとだれもいなくて、あわてて運動場を見に行ったこともありました。子供たちが走っている姿を見て、うれしくなり、一緒になって走ることも度々ありました。

しかし、このマラソンという競技は、あまりにも単調な運動で、継続して行なうことはとても難しいのです。日に日に運動場を走る子供が減ってきました。途中で学芸会もあり、そちらに気持ちが傾いてしまったこともあったでしょう。運動場を走る子供の姿を探すのが難しくなるほど、数が減ってしまいました。よく走っている子は、すでに三枚目のカードが終ろうとしています。まだ、一枚目という子もたくさんいる中で、すごい頑張りです。これほど差がついてきてしまったのです。

学芸会を終えた後、子供たちの気持ちがマラソン大会に向けられ、また、元氣よく運動場を走ってくれるようになります。そして、マラソン大会に勝つためにはなく、クラス全員で走ることにより、励ましあい、そこに団結が生まれると思います。そして、また、走ることに喜びを感じとってくれるでしょう。私も、子供とともに走っていききたいと思います。

マラソン 林 拓司

毎日、走っている

走れば走るほど体もきたえられる

楽になる

走ると、とてもつかれる

けれど、走った後は気持ちがいい

冬でもあせがながれてくる

マラソン大会はもっと長く走る

だから、もう少しがんばって走ってみたい

マラソン大会ではがんばりたい



寒風に向かって駆け出す4年3組の子

小さなスカイウォッチャーたち

『五年 星を見る会』

五年担任 竹平 真仁

二月二十日、水曜日、五年生児童二三名が参加して『星を見る会』が行われました。実際に星を見ながら学習したい。そんな気持ちから企画された会でした。そして、この会を実現するためには、講師をお願いした青木純先生のご協力がありました。科学部顧問でもある青木先生は、スカイウォッチングも趣味にしておられ、お忙しいなか学年を越えて快く講師を引き受けて下さったのです。

さて、当日です。この日は三度目の正直。これまで悪天候のために二度延期しています。

「先生。今日ならお母さんがむかえに来てくれるって言ったので、来てもいい？」

ご父兄にお迎えをお願いしたものですから、思わぬところで参加の希望がなくなった子もいました。

午後五時。教室に入りビデオで事前学習。さらに終了時間が遅くなるということで持参した夜食の時間です。あたりも本格的に暗くなり子どもたちは懐中電灯を手にはしゃぎまわっています。

「山の学習みたいだね。」

そんな声も聞かれます。無理もないでしょう。夜の教室で過ごすことなどめったにないのですから。

午後六時十五分。いよいよサンクガーデンに集合です。風もなくこの時期にしては暖かい夜でした。北の空を中心に薄く雲がかかっています。この日の観察の目玉となる一等星や二等星ははっきりと見えました。

子どもたちが手にしているのは星座板、懐中電灯、それに青木先生お手製の資料。この日の三種の神器です。整理して名倉先生のお話。続いて青木先生から実際に星をたどって、冬の星座について説明が始まりました。

まずは南の空の代表的な星座、オリオン座から。

オリオン座には二つの一等星があります。青白い高温のリゲルと、赤い低温のベテルギウスです。オリオン座には有名な大星雲があります。地球からおよそ千五百年離れています。

オリオンというのはギリシャ神話に出てくる狩人のことです。月の女神アルミテスを好きになってしまいましたが、アルミテスの友達の大地の女神ガイアが送ったさそりにさされて、殺されてしまいました。大神ゼウスは、オリオンをおしんで星座にしてやりました。オリオンは、星座になってもさそりがこわいので、さそり座が出てくるころになると、西の空に隠れてしまいます。

おうし座、ぎょしゃ座、ふたご座、おおいぬ座、こいぬ座、まだまだ話は続きます。

まるで夜空というキャンバスに描かれた絵を見ていくようです。

子どもたちは説明を聞きながら星を追いかけています。星座板と夜空を照らし合わせたり、友だち同士で夜空を指差して教え合ったり。

「あっ、わかった。あれがこいぬ座のプロキオンだよ。」

「えっ、どれ、どれ？あの明るいやつ？」

「ちがうよ。あれは木星だって教えてもらったじゃん。」

この日は木星、金星、火星の三つの惑星も見られました。明るくまたたかない星が惑星です。

そろそろ北の空に目を移してみましょう。北斗七星は有名ですね。

北斗七星は、星座ではありません。わわわぐま星座の一部です。七つのうち二つが二等星なのでよく分かります。ひしゃくの先の二つの星を二五位星半のばしていくと北極星にいきあたります。

北の空には薄く雲がかかっており、これらの星は目のいい子には見えたようです。

さて、一通り説明も終わり、子どもたちはいよいよ運動場に散らばって行きました。

星座板を頼りにみんな思い思いの星をさがしています。

あちこちでいくつものグループができ、運動場に懐中電灯の光がゆれて、遠くから見るとまるで蛍が群れ飛んでいるようにも見えました。

みんな空を指差し、星座板と夜空を見くらべながら喜んでいました。一つ一つ星を見つけていくことが、うれしくてたまらないようです。

「カベラってどこにあるの。あれがそうかなあ？」

「そうだよ。あのカベラの近くにブラックホールがあるって資料に書いてあったぞ。」

「うそー。こわいなー。吸いこまれちゃうかやー？」

星を見ながら、果てしない宇宙に想いは広がっていきます。

星はあまり見つからなかったけれど、なぜか星を見るのに真剣になってしまったり、心が落ち着いて気持ちよくなってしまう。

いつもは（あ、星がたくさんあるな）という感じで、あそこにオリオン座があるとか、あそこに木星があるとか意識したことがなくて、星ってつまらないものなんだなあと思っていました。でも星を見る会をやって、また今度は時期を変えて星を見たいなと思いました。きつと今度はもっときれいに星が見えて、まるで自分が星の中に入ってしまうようになると思います。

星を見る会の時はちょっと雲が多くて見にくくて、自分が星の中に入ったような気分にはなれなかったけれど、星を見ていて心が落ち着いて、星はいいものだなと思ったから、星を見る会に参加してよかったなと思います。また今度、星を見よう。

（成瀬 顕代）

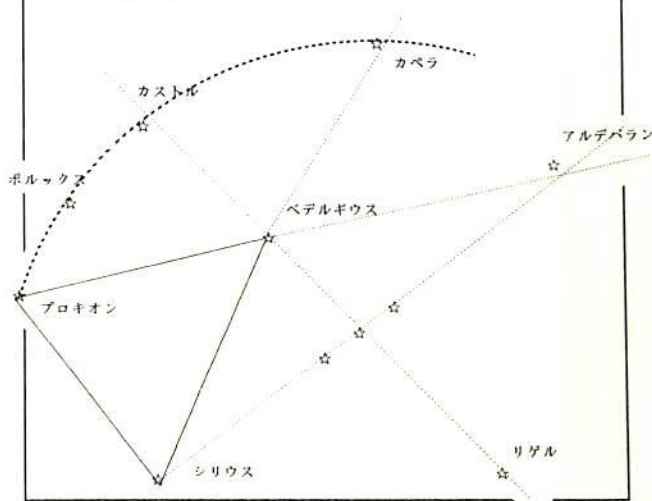
星を追いかけるがらの楽しい時間はあっという間に過ぎ、ふと気がつけば星座たちも場所を変えていました。最後に運動場に整列。青木先生といっしょに今日見た星をたどって、冬の星座の探し方のおさらいです。

冬の十二角形

オリオン座のベテルギウスとおおいぬ座のシリウス、こいぬ座のプロキオンを結んでできる三角形のことです。この三角形の間にはめだつ星がないので大変きれいに見えます。シリウスとプロキオンの間には、天の川が流れています。目のいい人は見えると思います。

冬の十二曲線

シリウス、プロキオン、ポルクス、カストル、カペラとむすぶ流れるような曲線です。実際には、少しずれがありますが、明るいめだつ星ばかりです。



これらの星を目印にすると、星座が探しやすいのだそうです。

わずか数時間の『星を見る会』でしたが、この日の会は子どもたちにとって、ただの星の学習以上の何かがあったようです。私たちが夜空を見上げて星との対話を楽しむ、そんな心のゆとりを持つことの大切さを教えられたような気がします。殺伐とした世界情勢ですが、この小さなスカイウォッチャーたちが、いつまでも星との対話を楽しめるような世界であってほしいと思います。

八百吉おじいさん

六年担任 金子 喜子

「ふるさと土地」を象徴するものを探しに、福岡町の土呂の市を散策していた松原教頭先生は「手づくりのよもぎ餅」を売る穏やかな笑顔の老人と話を交わした。四年前の春のことである。そして、その年の初秋、学校の近くでその老人と出会う。

「草刈った後によもぎが新芽を出す。それを摘んで、ゆでてから冷凍しておけば、春でなくてもよもぎ餅が作れる。土地の空き地にもたくさん生えていますよ。」

あの時の素朴なよもぎ餅の味が思い出された。

教頭先生が出合った好々爺、子ども達が八百吉おじいさんと呼ばせていただいた方は、福岡町にお住いで、今年六十七歳になられる畔柳八百吉氏である。

第一上地区画整理組合理事長を務められ、その記念事業の一環として、学校へは「なかよし池」を贈っていただいた。氏と子ども達との出会いは、昨年の実践報告会に始まる。

当日の授業は、「ふるさと土地」に関するお菓子作りを計画。「よもぎ餅」を取り上げ、その講師を依頼したのである。餅と悪戦苦闘する子ども達をのぞき込み、

「いい子、いい子と言いながら、手の中がかわいくなって丸めるといいよ。」

いびつだが、初めて作った餅を食し、「おいしい。」と声を上げる姿を笑顔でうなずいていらした。

この時から、子どもの書いた手紙を一冊にまとめて届ける。すると返事はもちろん、その時々のお出来事を手紙に託して下さい。それはやがて、教室でお話を聞く会に発展した。

最初は、三善寺に安置されたお地蔵様のお話。氏の家まつわる事から、身近に感じ、回を重ねるたびにその人柄に魅せら

れていった。

体験をもとにしたお話は、決して自慢や説教ではなく、人柄そのままが浸み出て、どれも心に残るものばかりであるが、どの子もあげるものに「キツネ物語」がある。

満州に出兵。凍てつく夜、兵舎見回り時にキツネと出会う。巢のある場所は数十キロ先。不憫に思い、持っていたキャラメルを。当番のときのみ出現。一時姿が見えないので心配していると、子どもを連れて来た。当地を去る時、別れを言い、すべての菓子を友人に託した。その後、キツネは一度しか現われなかったそうである

●キツネは言葉を話せないが、八百吉さんは心から話しかけたので優しい人だと安心し近づいたのだ。

動物と話ができるなんて、うらやましい。

(中島 孝一)

●キツネが野犬のワナにかからないようにと心配。今、犬や猫をすぐ捨てる人が多いが考えてほしい。

これからは、僕の家を犬を大事にしよう。

(井口 博)

命あるものにはすべて平等に愛情を注ぐ氏の心は「ツバメの子育て物語」にも伺える。「中国農村の人々」「小さな兵隊さん」「弟の別れ」等々、どの話にも心が動かされ、笑顔に和み、「さん」から「おじいさん」と呼び方が変わっていった。戦争体験者である氏は、犠牲になるのは常に弱者であり、尊い命が無意味に失われる。その悲しみは消すことができない、と。しかし、「愛に国境はない」と涙で語る。

●人に親切にし、自分にできる限りの事はしてあげる。損得を考えたら、本当に人を喜ばすことはできない。

(近藤 友香・寺田 恵子)

●たかが子どもとばかりにしない。いつでも誰にでも笑顔を見せる大切さが分かった。

(星野 静子)

●大きな温かい手、何でも聞いてくれる耳、しわの刻まれた笑顔。血はつながっていなくても、もう私のおじいさんだ。

(伊豫田明子)

●私には、「すごいだろう」と見せびらかせたい気持ちがあるからだめだ。すばらしい心に進む道を教えていただいた。

(横山 知美)

子ども達は出合えた幸せを思い、貴重なお話を聞き、それぞれにたくさん事を学ばせていただいた。子どもから話を聞き、母親の声が集まる。

○義務教育では体験できない多くの心の触れ合いを深く感謝。子どものこれからの人生にとって大きな宝となる事と思う。

○お顔を拝見した事はないのに、家族の方々が想像できる。親以上の愛情が感じられ私も見習わなければと思う。

○この二年間、家庭の中で話題になった。つないだ手がとても温かかったと言う。その思いに負けぬよう子どもを育てていきたい。

○祖母に対する気持ちが優しくなってきた。これも常々、自分の孫のように優しく接して下さったおかげである。

二年間、温かく見守って下さったのは、家族の方々でもある。遠路の孫を迎えるかのように気遣って下さった。この中から学んだことも多い。

卒業を前にし、短歌を五編送って下さった。

ほめられて 我かしこしと思うなよ

誠にほめる 人は少なし

八百吉おじいさんと過ごした思い出は決して忘れないし、学んだ事を必ずどこかで活かしてくれるであろう。大好きな八百吉おじいさんだったから……。